

地域の人々と関わり，豊かな学び手を育む総合的な学習の時間

—浅間温泉の活性化を目指した生徒たちの姿を通して—

篠田 昌利 高度教職開発コース 教育課題探究プログラム

キーワード：総合的な学習の時間 地域の人々との関わり 自己の生き方

1. 研究の動機と目的

筆者は，4年前，信州大学教育学部附属松本中学校へ赴任し，副担任として関わった3年C組で忘れられない場面と出会った。それは，総合的な学習の時間のまとめとして，生徒，浅間温泉の方，保護者が一同に介した成果発表会の一場面であった。一つのグループが，「浅間温泉を訪れる人が増えたのかがわからないので，活性化したとは言い切れません」と発表した。その言葉を聞き，浅間温泉の活性化を目指し，山林の遊歩道整備の活動を生徒と共にやってきたKさんは，司会を制し，生徒たちの前で語り始めた。「活性化ができなかったというのは間違いだと思うのです。皆さんが思いをかけて浅間温泉のためにしたことは私たちを元気づけてくれた。それこそが活性化だと思うのです。10年後に皆さんが浅間温泉を訪れたとき，変わったなと思ってもらえるよう頑張ります」Kさんの言葉を受け，活性化ができなかったと語った生徒は，活性化の意味を立ち止まって考え，見つめ直していった。後に北原（2019）¹⁾がまとめたこの出来事は，筆者にとって，総合的な学習の時間での学びを考えるきっかけとなり，自分の学級の生徒にも，人との関わりから，自らの生活や行動を考えてほしいと願うようになった。平成30年度全国学力・学習状況調査報告書質問紙調査²⁾では，「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがありますか」の問いに対して，肯定的な回答（「当てはまる」及び「どちらかと言えば当てはまる」）をした児童生徒は，小学校で49.9%，中学校で38.8%であった。この結果が示すように，中学校期の生徒が社会参画・社会改善について考えていくことが必要であると言える。また，奈須（2017）³⁾は，「主体的な学びの究極の姿は，自己の生き方・在り方に迫る学びということになるのではないのでしょうか」と述べている。筆者は，総合的な学習における主体的な学びとは，生徒が積極的に活動に取り組み，達成感を得ることから生まれると考えていた。そのため，生徒の活動への意欲を持続させるために，教師の考えを都合よく生徒に押し付けることになることがあった。これは，生徒の実情を捉えきれず，活動ばかりを推し進めようとしてきた結果であり，教師は学習活動のねらいや子どもの実情に応じて，生徒の学びの何をまなざし，どのような学習指導を行うのかを判断しなければならない。本研究では，総合的な学習の時間の実践記録を手がかりに，地域の人々との関わりにどのような生徒の学びがあったのかを振り返り，学習として成立させるための教師の思考判断を照らし合わせて考察することを目的とした。

2. 研究の方法

- (1) 地域の人々との関わりにどのような生徒の学びがあったのかを考察する。
- (2) 学習として成立させるための授業構想や思考判断を照らし合わせて考察する。

3. 実践研究の具体と考察

3.1 自分の生活や行動を考える生徒と教師の学習指導

(1) 人との関わりから自己の生き方とつなげて考えた場面

2020 年 7 月（2 年時）コロナ禍での休校が明けると、生徒たちは「浅間温泉で働く人たちが今どんな思いでいるのかを知りたい」と考えた。そこで、筆者は、ホテル玉の湯の代表である Y さんとオンラインで対談し、生徒が感じている疑問を尋ねる場を設けた。観光客が減少していることや、従業員の方々が消毒作業に追われていることを知ると、生徒たちは、「浅間温泉で働く人たちを元気にしたい」と願い、思い思いの方法で活動を決め出していった。S 生は、楽器の演奏を届けることを考え、会の中で、仲間とともに『風が吹いている』の演奏を披露した。会の終わりに、S 生は「子どもの私たちが浅間温泉を応援するなんておこがましいんじゃないかと考えていた」と Y さんに話した。Y さんは「若い人たちが一生懸命やっていることが、僕たち地域の元気になっているんだよ」と伝えた。そのやりとりを振り返り、S 生は、感想に次のように記した。

浅間温泉の人たちに応援を届けて喜んでもらえてよかった。やる前は、あんまり知らない私たちが応援を届けるってちょっとおかしい感じがしたけれど、終わった後に Y さんと話して、こうやって誰かを元気にする力が私たちにはあるんだと思った。次は、もっともっと浅間温泉に出かけて行って、よく知って、浅間温泉の人たちや浅間温泉のために私たちにできることをしていきたい。

発表後も、自分の考えや行為が、浅間温泉の人にとってよかったのかを問い続けた S 生は、Y さんからの言葉で、自分たちの活動の有用感を味わい、人との関わりから学ぶことの意味を自覚した。「おこがましい」から「もっともっと浅間温泉へ出かけて」へと変わったように、学んだことを自己の生き方とつなげて考える S 生の姿と出会うことができた。

(2) 思いや願いを捉え、支えていくこと

先の発表会を迎えるにあたり、筆者は、事前に Y さんと打ち合わせを行った。その際に、Y さんから「まとめの場面で生徒にどんなことを話したらよいか」と尋ねられた。筆者は、次の活動のきっかけになることを期待して、「これからも浅間温泉のために何かしてほしい」といった言葉をかけてもらうようお願いしようと考えた。しかし、同時に、教師の意図が透けて見え、生徒がそれを感じてしまうのではないかと考えた。そこで、筆者は、コロナ禍でも浅間温泉で働く人たちに寄せ続けてきた思いや願いを理解してもらえるよう、発表会に至るまでの経緯を写真と共に伝え、当日の発表会の最後に、感じたことを率直に話してもらうようお願いした。浅間温泉の人にお問い合わせされたから手伝うのではなく、生徒たちが自ら浅間温泉の人のために思いを寄せてほしいと願ったためである。結果として、Y さんがその場で感じたことから発せられた言葉が、S 生へ届くこととなった。筆者

は、地域の方とのつながりを期待する際に、地域の人、生徒の両者の思いや願いを捉え、支えていくことが重要であると実感した。

3.2 生徒の探究に対する教師の願いと教材化

(1) 思いや願いを基に、自らの行動を選択した場面

2020 年 2 月（2 年時）W 生は、0 生が感染警戒レベル 5 の中、テスト前の休日に浅間温泉へ出かけて、旅館の調査をしてきたことを知ると、「自分のことよりも相手のことを考えるのはささやかなことなら簡単だけど、自分の生活を犠牲にすることは簡単にはできない」と、人や社会との関わりにおける自分の行動について考えていた。

2021 年 4 月（3 年時）筆者は、人との関わりから、自らの生活や行動を考える学びをさらに深めてほしいと願いつつ、情報収集のため、浅間温泉の方々から話を聞いた。その中で、ホテル玉の湯で仲居として働いていた M さんが、病気のために療養しているという事実と出会った。2019 年 10 月（1 年時）の職場体験で、生徒たちは、M さんから据え膳、片付けやお客さんを出迎える心構えを教えて頂いていた。また、M さんは、浅間温泉の民謡である浅間節の数少ない歌い手の一人であり、生徒たちは、音楽科の学習で、浅間節を題材の追究を行った経験があった。2021 年 9 月（3 年時）筆者は職場体験で M さんに感謝の気持ちを述べた 0 生に、M さんが休職し、療養中であることを伝えた。「自分たちに残された時間で、浅間温泉のためにできることをしたい」と考えていた 0 生は、「浅間節をクラス全員で歌い、映像に収めて M さんに届けたい」と願った。そして、自分が願うに至った経緯をまとめ、同じ思いを抱いていた H 生と共に、学級の仲間たちにその思いを訴えた。

2021 年 10 月（3 年時）0 生たちが仲間思いを伝える日の当日。W 生は、志望校の学校見学を辞退して、授業に参加した。筆者が、なぜ学校見学を休んで、参加したのかを尋ねると、「0 さんが、頑張っているのを知っていたし、私も、賛同してたから。クラスのみんななら 0 さんの気持ちをわかってくれると思ったけど、それぞれ活動していることもあるし、力になれることがあったらいいなと思って」と答えた。授業では、0 生たちの提案を、深く頷きながら聞いていた。M さんへ向けた撮影当日、W 生は大きな声で盛り上げ、笑顔で浅間節を歌いあげ、次のように振り返った。

今日の浅間節の撮影がとても楽しかったです。みんなで盛り上がって浅間節を合わせたことが、私の元気になったし、嬉しくなりました。0 さんたちの提案を聞いたとき、私は、正直、私たちが浅間節を届けたら、M さんは、歌えなくなってしまった自分のことを考えて、寂しくなっちゃうかもしれないと思ったけど、今日の浅間節のあの雰囲気なら M さんに明るい気持ちになってもらえるんじゃないかと思いました。私たちの元気や明るさが、M さんに届いてほしいです。

W 生は、0 生に思いを寄せ、友の思いに応え、学級の一員として、何をすべきか、どのようにすべきかを考え、行動することができた。浅間節の撮影を通して、学習の成果から達成感や自信をもち、自分たちのよさや可能性に気付くことができた。思いを伝えようとする友の存在、相手を思いやる心、自分たちのよさの自覚があり、自己の生き方とつながって考える W 生の姿へとつながっていると捉えた。

(2) 思いや願いを基に主体的な探究を支える学習指導

筆者は、自分たちが行動していることの意味や価値を、誰かのために行動することから感じてほしいと願い、本題材を設定した。生徒が思いや願いをもつ際に、Mさんの存在、Mさんへ浅間節を届けたいと願うO生に対する思い、各グループで進めている活動と浅間節の活動との折り合い、映像を視聴したMさんの様子が生徒の思いや願いを支えると考えた。O生にいつMさんが療養中であることを伝えるか、その場面や伝え方を大切に考えた。当初、O生はT生と共に、浅間温泉を訪れた人が散策しながらごみを捨てられるよう、ごみ箱の設置を考えていた。筆者は、あらかじめ、浅間温泉観光協会を尋ね、ごみ箱の設置は考えていないことをつかんでいた。そして、ごみ箱の設置では、生徒の思いや願いとは異なる結果となることが予想され、生徒の探究が成功体験とはつながりにくいと判断した。そこで、設置に向けて管理面、法律面から調べていたO生との会話の中で、「そういえば松本の街中にもごみ箱ってないよね」と話した。その言葉をきっかけに再度調べ直したO生たちは、公園や街頭にごみ箱が減らされている事実と出会うと、ごみ箱の設置が環境の悪化を招く可能性を考え、設置の活動は難しいと結論付けた。そして、自分たちにできることを再び探し始めていた。ちょうどその時、文化祭の学級展示の準備でU生が、浅間節を模造紙にまとめていた。筆者は、その模造紙をO生とT生が眺めながら話している場面と出会った。模造紙を見ながら、「浅間節懐かしい。楽しかったよね」と話すO生に対し、Mさんが浅間節の歌い手だったことと共に、療養中であることを伝えた。O生は、職場体験でMさんに親切にしてもらったことを想起し、浅間節をMさんへ届けたいと願っていった。そして、Tさんと共に仲間へ自分の思いを理解してもらえようプレゼンを作っていた。筆者は、そのプレゼンを一緒になって考えた。学習活動のねらいに応じ、教師が意図的に関わり、生徒の意思決定を促していくことが大切だと実感した。

4 成果と今後の課題

本研究では、地域の人々との関わりから学ぶ生徒を支えていくためには、教師の「思いや願いを支える教師の構え」や「教師が意図的に関わり、生徒の意思決定を促していくこと」が大切であると再確認された。同時に筆者にとって課題も見えてきている。学びの行く末を見通せず、生徒の成り行き任せや放任になってしまうこともある。子どもの実情に応じて、生徒の学びの何をまなざし、どのような学習指導を行うのかを今後も考え続けていられる教師でありたい。

文 献

- 1) 北原遼司(2019). 浅間温泉町おこC 温泉街に一筋の光をもたらした41人の中学生による挑戦の記録
- 2) 文部科学省 国立教育政策研究所(2018). 平成30年度全国学力・学習状況調査報告書質問紙調査
- 3) 奈須正裕(2017). 「資質・能力」と学びのメカニズム. 東洋館出版